「男、突っ走る！」

第111回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（25）	『オフィスツリーイン』代表
木内	孝志	（54）	雅也の父
木内	真保	（52）	雅也の母
木内	健次郎	（21）	雅也の弟
国枝	佐代子	（60）	『スリジェネ』総合プロデューサー
住吉	真由美	（43）	『スリジェネアカデミー』ダンス講師
谷岡	典江	（58）	『スリジェネアカデミー』演技講師
本村	晴臣	（55）	『スリジェネアカデミー』歌唱講師
加原	美穂子	（36）	『スリジェネ』会計担当兼メンバー
野倉	浩太	（23）	元『スリジェネ』メンバー
富永	茜	（24）	元『スリジェネ』メンバー
眞榮田	浩平	（25）	元名古屋芸術専門学校学生
長井	夏美	（25）	元名古屋芸術専門学校学生／声の出演
加藤	直也	（25）	元名古屋芸術専門学校学生

1　木内家・雅也の部屋

雅也がパソコンで仕事をしている。

N「広島から戻ってきて数日が経ち、二〇二〇年の四月という新年度を迎えましたが、世間一般は新型コロナウイルス感染症という見えない脅威と戦う日々がずっと続いていました」

2　喫茶店

N「四月七日に埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、福岡県の七都府県に対し五月六日までの緊急事態宣言が発出されたことで、スリジェネアカデミーレッスンでも、第一土曜日のこの日を急遽臨時休校とし、急遽の臨時会議が行われました」

雅也、佐代子、住吉、谷岡、本村、美穂子がマスクをしながら話をしている。

佐代子「コロナの影響が、思いのほか拡大してます。私たちや子どもたちの安全を第一

に考えたうえで、当分、休講にしたほうが良いんじゃないかと思ってます」

雅也「僕も、そのほうが良いと思います。テレビでも、国民的コメディアンがコロナで亡くなったことで、コロナの存在がいかに脅威な存在になっているか……。今はもう、飲みに行ったからとか、夜の店に行ったから感染したとか、そんなレベルじゃなくなってるでしょうし」

住吉「うちのダンス教室も、保護者の方からしばらく子どもを休ませたいっていう連絡だったり、この状況でもレッスンを続けるのかっていう問い合わせが来てるんです。今のところは続けるって判断したら、それをきっかけに教室を辞めさせるっていう保護者の方も出てきて」

谷岡「あら、そんなことがあるんですか？」

住吉「もし自分の子どもが、ダンス教室で感染したらってことを考えると、むやみに外出させるのも嫌になったんでしょう」

本村「でも、だからって外出しないわけにもいかないしね。仕事だってさ、内容によっては直接会わないと成立しないものだってあるんだから。現に僕らエンタメの世界なんて、直接稽古してナンボの世界じゃん。歌の別撮りなんて、そもそも無理な話だし」

美穂子「それでも、保護者の中には習い事をしてる余裕なんてないっていうのが正直なところなんでしょ」

雅也「スリジェネアカデミーは、保護者の方が皆さんご理解ある方ばかりなので、変な問い合わせや質問もありませんけど、これから事態が悪化したら、どうなることになるか」

佐代子「愛知県も今に、緊急事態宣言が出る可能性もないとは言えないと思うんですよ」

雅也「子どもたちも可哀想ですよね。学校の臨時休校が続いて、せめて習い事とかで、友達と会いたいでしょうに、今はそれも厳しくなってるんですからね。不憫でなりま

せんよ」

谷岡「そうよね。あの子たち、レッスン受けてる間は、それは楽しそうだもの。吸収も早いから、教え甲斐もあるしね」

佐代子「演劇業界も、これからどうなるか分かりませんね」

雅也「ドラマの現場でさえ、収録が厳しくなって、過去の作品の再放送をする局もあるみたいですよ。撮影現場なんて、何十人ものキャストやスタッフが同時に顔を揃えるんです。そこで集団感染みたいなことになったら、どうなるか……。史上例のない、未曾有の出来事が起こってるんですよね」

佐代子「情勢を鑑みたうえで再開することを前提として、アカデミーはしばらく休講にしましょう。私から、今日後ほど全体ＬＩＮＥに連絡をします」

難しい顔の雅也。

Ｎ「その日のうちに、国枝さんからアカデミー全体に向けて、休講の連絡がなされまし

た」

3　木内家・雅也の部屋

雅也がスマホで話している。

雅也「（電話に）ああ、確かに延期したほうが良いね」

4　アパート・浩平の部屋

浩平がスマホで話している。

浩平「だよな。独立するにあたって、何から始めて良いのか分かんなくて、こういう時には独立の先輩であるうっちーに聞くのが、一番かと思ったんけどさ。ちょっと、コロナの影響も怖いしね」

5　木内家・雅也の部屋

雅也がスマホで話している。

雅也「まあ、状況を見てまた日程決めよう。その間に、何か進めれそうな準備のことは、いくらでも教えるから。うん、はいはい、

じゃあまたね」
と、電話を切ると、出ていく。

6　同・居間

台所で雅也が昼食の支度をしている―
―玄関のドアの開閉音が聞こえ、険しい顔をした真保が入ってくる。

雅也「おかえり。今から昼の支度するから」
真保「ねえ、雅」
雅也「どうしたの？」
真保「パート先、クビになった」
雅也「（振り向いて）え？　急にどうして……」
真保「コロナで、業績が悪化したんだって。それで、会社でもリストラをしなきゃいけない状態になってね」
雅也「……」
真保「こういう時、一番最初に首を切られるのは、私たちパート職員なんだよね」
雅也「私たちって、じゃあ母さん以外にも、

パートさんが……」
真保「私含めて、七人解雇」
雅也「いつまでなの？」
真保「今月末で終わりだって」
雅也「そんな急に……」
真保「そう思うでしょ？　だから、同じパート仲間の人たちとも、いくら何でも急すぎるって愚痴ってたの」
雅也「これから、どうするの？」
真保「失業手当があるとはいっても、新しいところ探さないとね。ただ、この状況でしょ。それほど求人があるとも思えないし」
雅也「コロナの影響が、やっぱり出てるんだね」
真保「あんたも、大丈夫なの？」
雅也「え？」
真保「仕事が延期になったり、キャンセルになってるんでしょ」
雅也「うん……。だから、今助成金とか補助金とか調べてるの。今のままじゃ、利益ど

ころか仕事すらなくなりそうだからね。一時でも首が繋がるんなら、コロナの状況だからこそできる新しいビジネス展開も考えた方が良いのかなとも思ってる」

真保「本当、コロナってどうなっちゃうんだろうね……」

雅也「……」

N「四月十二日には、コロナによる日本国内の累計死者数が百人を超え、四日後にはついに全都道府県に対し緊急事態宣言が発出されました」

7　カフェ『レインボー』・外観

駅前にあるコンクリート造りのカフェ。

N「この状況下でも、国枝さんがオーナーを務めるカフェ『レインボー』は何とか、オープンすることができました。ですが、隣町に住む僕は感染拡大の影響のこともあり、オープンへの出席を控えることにしました」

8　コンビニ（夜）

レジの上からアクリルフィルムが吊るされている。

雅也が缶コーヒーやおにぎりなどを買っており、マスクをした健次郎がレジ打ちをしている。

雅也「（アクリルフィルムを見て）これ、邪魔だね」

健次郎「しょうがないだろ。飛沫対策なんだから」

雅也「マスクでの接客もやりづらいんじゃないの？」

健次郎「息が詰まって、頭痛くなるときあるからな」

雅也「酸素がちゃんと回ってないんだよ。けどマスク着用を推奨してるんだもん、しょうがないか」

健次郎「これで、感染が防止できればな」

雅也「マスク、ここも売ってないんでしょ？」

健次郎「今、在庫ゼロ」

雅也「やっぱり」

健次郎「マスクつける習慣がない人がさ、車に乗ってる途中でマスクを忘れたことに気が付いて、それでコンビニで買うんだと思うんだけど、意外にそういう人が多くてね」

雅也「まあ、分からなくはないな。でもさ、そういう人たちって要するにマスクをしない状態で店に入ってくるわけでしょ？　大丈夫なの？」

健次郎「だから、定期的に店内の消毒をしてるの。それにさ、来週からしばらく深夜の営業を中止するし」

雅也「どうして？」

健次郎「だって緊急事態宣言が出てるんだぞ。むやみに外に出るなって言ってる状態で、深夜に店開けてたって、誰も来ないだろ」

雅也「そういうことね……」

健次郎「はい、八百五十三円です」

雅也、財布から小銭を出して、健次郎に出す。

健次郎「ちょうどですね」
雅也、おにぎりと缶コーヒーを鞄に入れると、
雅也「じゃ、夜勤頑張って（と出ていく）」
健次郎「ありがとうございました」

9　木内家・居間（夜）
雅也が帰宅する――孝志が一人で夕飯を食べている。
雅也「ただいま」
孝志「お帰り、どっか行ってたのか？」
雅也「ちょっとコンビニに」
孝志「健、今日夜勤か？」
雅也「うん。ただ、来週から夜勤なくなるって」
孝志「どういうことだ？」
雅也「コンビニ、しばらく夜の営業は辞めるんだってさ」
孝志「まあ、これだけのことになればな。深夜にコンビニ開けてても、客は来ないか」

雅也「うん。いろんなところで、コロナの影響が出てるんだね」
孝志「うちも、工場ごとで感染対策徹底するって。それに、保養所もしばらくは閉鎖するんだって」
雅也「使う人いないんだ」
孝志「それもあるし、もし使って集団感染になったら、仕事にも影響が出るからな。うちは規模がでかい分、誰かがコロナになったら、周囲のラインを止めたり、感染経路の確認しなきゃいけないみたいで、いろいろ面倒なんだよ」
雅也「うわ、大変そう」
孝志「当然海外出張はおろか、県外の出張もしばらくはなくなるだろうな」
雅也「……」
孝志「お前も、結構県外に知り合いいるんじゃないのか？　専門学校の友達、何人か、東京にいるだろ」
雅也「まあね」

孝志「俺も、東京に知り合いがいるけど、向こうは結構大変らしいぞ。この状況でも、満員電車に乗らなきゃいけなくて、電車に乗るのが怖いってさ。企業の中には、自宅でやるテレワークっていうのを取り入れてるみたいだけど、うちみたいな製造現場は在宅勤務ってわけにもいかないしな」

雅也「そうだよね」

孝志「ただ、営業とか総務とか、デスクワークがメインの部署は、社員の何人かを在宅勤務にしてるそうだ。特に小さい子どもを持つ家庭はな」

雅也「学校もしばらく休校になると、嫌でも家に子どもがいるもんね。保育園とか学童も休みにしてるところも多いし、家で子どもの面倒を見ながら、仕事しなきゃいけないわけだ」

孝志「いつまでこんな状態が続くんだろうな」

雅也「ちょっと、友達と電話してくる」

10　神奈川・直也のアパート（夜）

パソコンでオンラインゲームをしながら、スマホのスピーカーで話している直也。

直也「ありがとな、心配してくれて」

スマホから雅也の声が流れている。

雅也の声「だって、東京の方じゃ、どんどん感染拡大が広がってるってニュースで見たからね。専門の同期だって、何人も東京に行ってるし、ちょっと心配になるからさ。みずちゃんも、元気にしてる？」

直也「ああ、今は部署がお互いに違うけどさ、お互い忙しくやってるよ。ま、俺も福沢もこの影響でリモートワークになったけど」

雅也の声「やっぱり、どこもリモートワークなんだね。昨日、あつぽんに連絡したらさ、あつぽんも京都で在宅勤務になったって言ってたんだわ」

直也「ゲームとかＣＧとか、パソコン相手の仕事だと、どうしてもそうなるよな。お前

も、リモートワークなのか？」
雅也の声「そもそも打ち合わせとか仕事が全部延期になっちゃった。演劇のほうも、しばらく休講になっちゃってね」
直也「大打撃食らったんだな。仕事の方は大丈夫か？」

11　木内家・雅也の部屋（夜）
雅也がスマホで話している。
雅也「（電話に）みんなに心配させちゃってるね」
直也の声「当たり前だろ。俺たち同期の中で、唯一自分の屋号で動いてるんだから。企業だってコロナによる倒産が増えるんじゃないかって言われてるんだ。誰だって気になるだろう」
雅也「まあね……。三月末からスケジュールが真っ白になったことも多くあってね」
直也の声「ああ、それで広島行ったんだろ。ＳＮＳで見たよ」

雅也「広島にいる間、ゆっくり骨休めして、四月一日からまた頑張ろうって思ってたんだけど、まさかここまでコロナが広がるなんて思わないでしょ。これから、この難局をどう乗り越えるか、ちゃんと考えなくちゃね……。まあ、これからいろいろ頑張ってみるわ。加藤も、くれぐれもコロナに気を付けて。うん、それじゃあね、はいはい（と電話を切る）」

N「就職で関東地方へ行った専門学校の友達のことが気がかりになるのは当然のことでしたが、僕にはもう一組、気になっている二人がいました」

12　神奈川・茜のマンション（朝）

浩太と茜が朝食を食べている。

茜「ねえ、しばらく撮影ストップ？」

浩太「うん。状況が分かり次第連絡するって来たけど、いつになるか……」

茜「私も、ついに来週からリモートワークに

なっちゃうしね……。本当、コロナって何なんだろう」

浩太「声優養成所に通い始めたナオも、しばらくはリモートレッスンになるってさ」

茜「お芝居がリモートでできるのかな。テンポとか間って、その場の空気によって変わるしさ、リモートでやったら電波障害でタイムラグも出てくるでしょ。けど、今はそれが最善の手なんだろうね。直接会わず、感染防止のために行えるレッスンってなるとさ」

浩太「そうだよな」

と、浩太のスマホに通知が来る――浩太、スマホを手にする。

浩太「あ、うっちーからＬＩＮＥ来てる」

茜「え？」

茜、浩太の隣に来て、一緒にＬＩＮＥの画面を見る――雅也からのメッセージが届いている。

雅也の声「コウタ、元気にしてますか？　そ

っちはコロナ大丈夫ですか？　とみーも元気にしてますか？　年末にコウタと会ってから、この数ヶ月でこんなにも国内の情勢が悪くなるなんて思ってもみませんでした。今はお互いに大変な時期かもしれないけど、頑張りましょう。いつかまた、東京へ行ける日が来ますように。その時は、みんなで集まりましょう。ではでは」

浩太「うっちーも、大変なんだろうな」

茜「確か、スリジェネアカデミーもコロナで休校になるってＳＮＳでアップされてたもんね」

浩太「それにしても、この丁寧なうっちーの文面……俺たち同じメンバーで一期生なんだから、もっとラフに書けば良いのに」

茜「（苦笑して）まあ良いじゃない。それがうっちーの良いところなんだから」

浩太「そうだな」

茜「またみんなで、わいわい集まれる日が来ると良いけどね」

浩太「どうなるんだろうな、これから」
茜「そうだね……」

13　木内家・全景（数日後）
N「それから、数日経ったある日のこと……」

14　同・雅也の部屋
雅也がパソコンで仕事をしている――スマホに夏美からの着信がかかってくる。
雅也、訝しそうにスマホを手にする。
雅也「なつ姐さん……？　（とスピーカーにして電話に出ると）もしもし」
スマホから夏美の声が聞こえる。
夏美の声「もしもし、うっちー。久しぶり」
雅也「久しぶり。東京、大丈夫？」
夏美の声「うん、何とかね。ただ、テレワークになったけど。愛知の方は、大丈夫？」
雅也「うん、こっちも感染対策に敏感になりながら何とかやってるよ。てか、それより

どうしたの？　なつ姐さんから電話してくるなんて、珍しいじゃん」

夏美の声「あのね、うっちー。眞榮田が、脳腫瘍で倒れて、入院したんだって」

雅也「え、眞榮田が……」

夏美の声「映像専攻のほうで、連絡が入ってね。それで、うっちーにはすぐにでも伝えようと思って」

唖然としたままの雅也。

N「つい先日連絡を取ったばかりの眞榮田が、脳腫瘍で倒れたという知らせは、僕にとっては衝撃的な出来事だったのでした」

つづく